特集・古代文学における地域性―音と文字から考える―　夏期セミナー

三四〇一番歌の地名表記をめぐって

―万葉集東歌にみる地域性―

太田真理

〔原文〕

中麻奈尓　宇伎乎流布祢能　許藝弖奈婆　安布許等可多思
家布尓思安良受波

〔読み下し〕

中麻奈に浮き居る船の漕ぎ出なば逢ふこと難し今日にしあらずは　(⑭三四〇一)

〔口語訳〕

「**中麻奈**」に浮いている船が漕ぎ出して行ってしまったならば、逢うことはむずかしい。今日でなくては。

一　問題の所在

「古代文学における地域性―音と文字から考える―」というテーマを与えられ、万葉集をフィールドとしたときにまず想起されたのは、独立して一巻をなしている東歌の存在であった。それは都（大和）との対比において把握され、都とは異なる詠みぶりを持った歌世界として置かれたものであったことは確かであろう。東歌は一字一音節表記を基本とし、すべて短歌という統一的形式によって記されている。しかし、その内実は均一なものであるとは考えにくく、個々の歌には残された問題も多い。

冒頭にあげたのは、万葉集巻第十四東歌に「信濃国相聞往来歌四首」とある中の一首である。

校本等で確認するかぎり、本文の異同に関して大きく問題となるところはない。歌意としてもとくに難解ではない。「中麻奈」に浮かんでいる船が漕ぎ出してしまえば再び逢うことは難しいと、逢うことができる最後の機会としての「今日」の重みを詠んだ女の歌と解釈してよいであろう。

しかしながら、第一句の「中麻奈」について現行では「なかまな」「ちぐまな」の二説があって、いまだに定訓を得ない。訓が定まらない理由は、当該部分が三文字で表記されており、「中」の文字をどのように訓むかという点に問題が残るからである。すなわち巻第十四の歌は一字一音節で表記されるのが基本であり、当該部分についても本来は四文字で書かれるべきながら、異例の表記となっている。

歌意からみて、「中麻奈」は地名ないし地名に準ずる場所を示しており、そこを起点として留まっていた船が漕ぎ出して行

くことは確かであろう。二句以下の歌意がわかりやすいためか、『全註釋』も「内容は平凡だが、初句がよくわかれば、もつとその空気が出るだろう。」と含みを残して注するに留まっている。確かに第一句の訓が定まれば何らかの意味が加味され、歌の解釈が広がる可能性がある。

第一句に一字一音節の仮名でなく二音節仮名「中」が用いられ地名が書かれるという異例の検討を手掛かりに、そうすることで当該歌はどのような表現を持つことになったのか、そしてそれは万葉集東歌における地域性の問題をどのように浮かびあがらせるのかを探っていきたい。

二 「なかまな」と「ちぐまな」

はじめに古注釈の訓を確認する。『代匠記（初）』には「なかまなは所の名なるへし。これによりて信濃の国の哥とさたむれはなり」とあり、『考』には「ナカヲナカ」とある。一方『古義』は誤字説をとり、「『中志麻爾』ノ誤ニテ訓『ナカシマ』カ」として現在の川中島と比定した。また『信濃漫録』（荒木田久老）は、

舊説に、麻奈は眞砂子にて、今の川中島をいふならむといへれど、まな子に船の浮をるべきよしなければ、いかにぞやおもへりしに、彼國人小泉好平がいひけるは、こは水内郡に中俣（ナカマタ）といふ村あり。そこなるべしといへり。（略）さてその地は、千隈川へ犀川とす、ばな河の流れ落る河股なり。

といって、現在の千曲川西岸、長野市柳原中俣のことであると述べている。以上の説はいずれも訓を「なかまな」とし、信濃国内の実地名の解明を試みながら、その確定には至っていない。

しかし、これらの失われてしまった実地名の探索は、最早その真偽を確かめる術はない。それを突き止めることに大きな意味があるとも考えにくい。

では、近現代の主な注釈書はどのような説をとっているのだろうか。表にまとめると次のように分類される。

A なかまな	地名	一般名詞	折口「東歌疏」、井上新校、私注、新全集
		未詳	窪田評釋
B ちぐまな	地名		全註釈、全訳注、全注、全解
C 訓せず	地名		注釈、集成、釈注
			櫻井満「東歌の風土」
D 訓義未詳			新大系

A「なかまな」説については、「中流の意ではないかと思はれる。」（窪田評釋）、「川の中州」（全注・水島義治）、「麻奈（砂地）なる地名が信濃にあり上中下に分ったか。」（全訳注）などとあるが、いずれも未詳の地名とするに留まっている。C櫻井も、巻十四において国別に編まれた九十首の歌には当該歌を含めた二例を除いて全て地名が詠みこまれていることが明らかなことから、編纂当時は「中麻奈」が地名として詠みこまれたのであろうとしている。

その中で新全集は「なかまな」の訓をとりながらも

川の名であろうが、どの川か不明。「中」は tjiuŋ のような発音の字なので、編纂者は千曲川に同じと認め、原文に

「知具麻」とある前の歌の後に収めたのであろう。

という。「前の歌」とは

信濃なる千曲（知具麻）の川の小石も君し踏みてば玉と拾（ひり）
はむ　（⑭三四〇〇）

をさしており、この歌の第二句「知具麻」と「中麻」が同音であるために並置されたというのである。前後の二首の繋がりをふまえたうえで「中」字の音に関心を向けていることは、注目に値しよう。

一方、Bの「ちぐまな」説をとる注釈、集成、釈注は、いずれも同一の説に依拠している。それは、都竹通年雄の「巻十四の『中麻奈』」という論文で、奈良時代の「中」の漢字音に注目して当該歌を読み説こうとしたものであった。[1] Dの新大系も、訓義未詳として訓を施さないものの、頭注で都竹氏論を紹介している。都竹論文の詳細については、後に詳しく述べる。

次節では、A「なかまな」、B「ちぐまな」説について順に掘り下げて検討する。

三　「なかまな」説の検討

「なかまな」「ちぐまな」の両訓を掘り下げるにあたり、万葉集中の「中」字の用法について整理しておきたい。

万葉集において歌中に「中」字があらわれるものは、全六十四首である。そのうち「なか」と訓読するのが適当と考えられるのは、「居中（田舎）」、「中言」、「野中」、「海中」、「さ夜中」、「世の中」、「中上り」など名詞が三十七例、副詞「中々に（なかなかに）」が十例、地名は「象乃中山」、「中（那珂＝讃岐）乃水門」、「中（那珂・那賀＝武蔵）」の三例である。

また、「心の中」のかたちで「うち」と訓むものが十四例ある。

すなわち、歌中の「中」は読みが確定できるものはすべて訓読であると確認され、この他は、当該歌とともに巻十四の三四一九番歌の第二句「奈可中次下」が訓未定である。[2]

次に、万葉集において「中」字が音読み「チウ」として用いられているのは全十七例である。「宮中」、「心中」が各三例、「海中」、「庭中」、「中衛」、「林中」が各二例、「京中」、「中宮」、「道中」が各一例である。これらは全て題詞、左注中の用字であるので、歌中の「中麻奈」の「中」を音で読むとすればやはり異例とならざるを得ない。

さて「中麻奈」の「中」は歌中の用字であるから、他の例に従えば「なか」と訓むのが通常ではあろう。そうとすれば、「麻奈」の意味を考えなくてはならない。『全訳注』は、「未詳の地名。麻奈（砂地）なる地名が信濃にあり上中下に分ったか。」と述べるが、『全註釈』は「マナゴ（眞砂）のマナは、眞名井などのマナと同じで、マナだけ遊離することはあるまいとも思われる。」と立場を異にしている。

他の古代の文献にも「麻奈」という地名の例はなく、「上麻奈」「下麻奈」といった例もない。川の「中流」説（窪田評釋）、「中州」説（全注・水島）もあるが、いずれもそれを「麻奈」と称した確たる根拠が見出せない。先にあげた『信濃漫録』は、「彼國人小泉好平がいひけるは、こは水内郡に中俣（ナカマタ）といふ村あり。そこなるべしといへり。」とするが、小泉好平なる人物の

主張の根拠もまた定かではない。

以上により、「なかまな」と訓むことについてはいずれも、その確たる根拠が見つからないと同時に、その意味も確定できないのである。

そこで次に「ちぐまな」説を勘案してみたい。「ちぐまな」説をとる注釈書は、いずれも都竹通年雄の論文「巻十四の『中麻奈』」を根拠としている。少々長くなるが以下に概要をまとめる。

都竹は「中」字の音を万葉集巻十四の書記法の中で点検し、韻鏡にてらしたうえで次のように述べている。

萬葉集巻十四の歌は原則として一モーラに漢字一字ずつ當ててあるが、例外として、

イ、「相模」「武蔵」「駿河」「信濃」「筑波」「筑紫」「對馬」など、一般にそのころの文字言語において通用していた地名の文字。ただし、これらの例はみな音(オン)である。（訓ではない）。（略）

ゆえに中麻奈の中も音によつて書いたと考えられる。従ってこの「中」は音で讀むべきであつて、ナカとかウチとか讀むべきではない。（略）

中もナラ時代の字音は tiŋ であつた可能性が多い。taŋ の宕をアタゴのタゴに當て、相の saŋ をサガミのサガに當てたように、中の tiŋ をチグに當てる事があつたと考えられる。

とするのである。さらに萬葉集にしぐれ（四具禮、之具禮、思具禮など）を「鐘禮」の二字で書いた例があることを指摘。これにより、「鐘」が一字でシグの二音を表していることがわかるとした。これを傍証として、「中麻奈」の「中」は「チグ（tiŋ）」と読み「中麻」を「チグマ」と読んで千曲川をさすとし、残る「奈」＝ナについては、川を示すアイヌ語「ナイ」の語幹が残ったものだと結論付けた。

そこで、巻十四における一字二音節表記を確認すると、都竹論文の指摘の通り地名（国名）表記に用いられていることがわかる。筑波（七例）、武蔵（四例）、信濃（三例）、相模（二例）、ほか駿河、筑紫の如くである。他に未詳の「芝付」（三五〇八）があるが、これも地名と考えられる。

沖森卓也は古代の文字表記に関する分析の中から、和銅六（七一三）年の所謂「好字令」を契機とした地名表記のあり方について次のように述べている。[3]

「監」のような二合仮名[4]は固有名の表記、とりわけ地名の表記に利用されることが多い。

相楽（さがらか）　相模（さがみ）　平群（へぐり）　信楽（しがらき）　信濃（しなの）　群馬（くるま）（「楽」k韻尾　「相」ŋ韻尾「信・群」n韻尾）

これにてらすと、「中」もŋ韻尾にuを添えて韻尾を音節化し「チグ」としたものと考えてよいであろう。

これに加え、『古事記』に見られる「当麻（たぎま）」の地名表記も、「当」の韻尾ŋにiを添えて音節化し二字表記した地名といえ、「中麻」も同様にŋにuを添えて二字表記した地名であることの証となると考えられる。

しかし、都竹が「ナ」にアイヌ語の名残をみることについては、その査証が見出せず、無理があるのではないかとせざるを得ない。

この都竹説を支持しつつ、方言論から当該歌の音を明らかにしようとしたのが、馬瀬良雄「『千曲川』の方言チョーマ考」である。[5]

馬瀬は長野県東北信の「千曲川」をさす方言「チョーマ」を調査しその語源を考察。その元の形が「チグマ」であるとする。[6]さらに語源をさかのぼると、「チグマ」の祖形とされる万葉集⑭三四〇〇歌の「知具麻」は［tji-guma］と発音されたと推定されるとした。このことから、次歌三四〇一の「中麻奈」の訓みについて、チグマナと訓んだ都竹氏論を大筋で支持した。

「知具麻」の語源としては「千隈」、つまり「屈曲の多い（川）」という説を採る。「千曲川」の「千曲」（［tjikuma］）についても同じように考え、両者の違いは、連濁の有無によるものとする。「ナ」については、川に対する親愛の気持を表したものとした。接尾語「な」が「人」を表す語、「時」を表す語に付くことの多いことは確かである。だが、奈良時代東国方言では、接尾語「ろ」が、「背ろ」「妹ろ」のように「人」を表す語に付くほか、「夜ろ」「馬来田の嶺ろ」におけるように、種々の語に付いた。それを考えると、「な」もこのように地名に接続し得、千曲川に対する親愛の気持ちを表したのではないか、と論じた。

以上の馬瀬説は、現代の方言研究から古代に遡及したものであるから、そのまま万葉歌の解釈に当てはめることには慎重になる必要はあろう。しかし、それが奈良時代の音と繋がっており、前歌三四〇〇番の「知具麻」とも呼応するという点で、都竹説を支持するに有力であると考える。

接尾語「な」については、地名に付いた例がないという点が弱いところであるが、傍証としての接尾語「ろ」には、他にも地名「伊香保」について親しみの意を添えた「伊香保ろ」の例（四例）もある。

こうした検討のもとに、異例ではあるが「中麻奈」は「ちぐまな」と訓み、千曲川を親愛をこめて呼んだものと解釈することは可能だと考えられる。次節ではそれをふまえ、三四〇一番歌の第一句を「千曲川に」と解した場合の歌表現について考察をすすめたい。

四　「ちぐまな」の訓と歌表現

第一句の訓が「ちぐまな」であるとした場合、この歌はどのような意味を獲得するのだろうか。表現性の面から考えてみたい。

まず着目されるのは、万葉歌にしばしば詠まれる「くま」（隈）という場所との関連である。（〇内は原文表記）

味酒　三輪の山　あをによし　奈良の山の　山の際に　い隠るまで　道の隈（隈）い積もるまでに　つばらにも　見つつ行かむを…　（①一七）

…玉藻なす　寄り寝し妹を　露霜の　置きてし来れば　この道の　八十隈（八十隈）ごとに　万度　かへり見すれど　…　（②一三一）

…楽浪の　志賀の唐崎　幸くあらば　またかへり見む　道の隈（道前）八十隈（八十阿）ごとに　嘆きつつ　我が過ぎ行けば…　（⑬三二四〇）

などからわかるように、「くま（隈）」とは、道や川が曲がっているところである。万葉集の歌では、ある人や土地に、心を残したまま旅立った人が、道々振り返っては見ようとした場所として詠まれている。その地点を過ぎると、懐かしいその場所がいよいよ見えなくなってしまうという、「見納め」の場所として特別な意識を持たれていたと解することができる。

…しきたへの　妹が手本を　露霜の　置きてし来れば　この道の　八十隈ごとに　万度　かへり見すれど　いや遠に里離り来ぬ　（②一三八）

ともあるように、見通しがきかなくなることで、人と人、人と土地との繋がりや思いが絶たれようとする場所、或いはぎりぎりで繋ぎとめる場所が「隈」であるともいえよう。

また、「隈」は陸上の道の景ばかりではなく、「川隈」「水隈」として屈曲する川の情景としても詠まれる。

…こもりくの　泊瀬の川に　舟浮けて　我が行く川の　川隈（川隈）の　八十隈（八十阿）おちず　万度　かへり見しつつ　玉桙の　道行き暮らし…　（①七九）

み吉野の水隈（水具麻）が菅を編まなくに刈りのみ刈りて乱りてむとや　（⑪二八三七）

このことは、「ちくま」が「千の隈」を持つ曲がりくねった川の意で理解されたことと重なってくる。

そうした旅立ちの不安や別れの悲哀は、この歌が「千隈」という名の地名であるからこそ、切実さを増して読み取れると考えられる。歌の後半「漕ぎ出なば逢ふことかたし今日にしあらずは」という女の切羽詰った思いの表現も、より生きる結果となろう。

次に問題となるのは、その千の隈を持つ川に「浮き居る船」のもつ意味である。これには次のような類想歌を指摘できる。

鳥じもの海に浮き居て沖つ波騒くを聞けばあまた悲しも　（⑦一一八四・羇旅作）

家にてもたゆたふ命波の上に浮きてし居れば奥か知らずも　（⑰三八九六・天平二年庚午冬十一月大宰帥大伴卿被任大納言　兼帥如舊上京之時）

これらの羇旅歌の有り方から「浮き居る船」は、居所の定まらない旅の不安や寂しさを表現していることは明らかである。そしてその浮遊感は、明日は別れなくてはならない恋の頼りなさを表すことにも繋がっていよう。そうした浮遊感や不安感は「千隈」と結びつくことで一層寂寞感を増していく。

結句の「今日にしあらずは」にみられる今日へのこだわりは、次のように、刹那的な恋の切迫性を表すときに用いられる表現である。

…嬉しみと　紐の緒解きて　家のごと　解けてそ遊ぶ　うちなびく　春見ましゆは　夏草の　繁きはあれど　今日の楽しさ　（⑨一七五三）

…人妻に　我も交はらむ　我が妻に　人も言問へ　この山を　うしはく神の　昔より　禁めぬ行事ぞ今日のみは　めぐしもな見そ　事も咎むな　（⑨一七五九）

このような表現に関し土井清民は

一首の主眼となる「今日にしあらずは」と、「今日」に執着するのは歌垣での一つの表現でもある。（略）このよう

に見てくると、ナカマナの地は遠方の諸国から舟が集積し、男女の会集で賑わう市がたち、歌垣の行われる地であったのかもしれぬ。

と述べている。[7]それも一つの可能性と考える。その場合も含めて、やはり「千隈」と関連づけられることで「今日でなくては」という情感が増すといえる。

このように第一句を「ちぐまなに」と訓んだ場合、当該歌は恋の別れの情趣の中で、今日ならではの逢いを希求する歌としての表現の幅を拡げることとなっていたのである。

五　「信濃国歌四首」と都の対比

前節では、三四〇一番歌を「ちぐまなに」と読んで、切迫した恋の別れの歌と位置づけることが可能であることについて述べたが、もう一点「信濃国歌」として連ねてあげられた四首(⑭三三九八～三四〇一)の関連性についても考えておかなくてはならないであろう。

a人皆の言は絶ゆとも埴科の石井の手児が言な絶えそね

b信濃道は今の墾り道刈りばねに足踏ましむな沓履け我が背

c信濃なる千曲の川の小石も君し踏みてば玉と拾はむ

d中麻（ちぐま）なに浮き居る舟の漕ぎ出なば逢ふこと難し今日にしあらずは

aで、皆からの言葉（便り）は途絶えても埴科の石井の娘の言葉は絶えてくれるなと言う男は、信濃を離れようとしている。別れに際してなおも心残りな男の気持ちを伝える歌である。bには、開墾されたばかりの信濃道へと夫を送り出す妻が、沓をお履きなさいと言って旅の前途を思い遣る様子があらわれている。[8]信濃道は信濃へと通ずる道であるから、妻は国外にいて信濃への道を辿る夫を思い遣っているらしい。cは、千曲川の何ということもない小石でも君が踏んだものであれば玉として拾おうと、瑞々しい娘子心を感じさせる歌である。しかしその小石は、あたかも去っていく男の形見のように受け取れる。

これに当該歌であるdを加えた四首は、緊密な配列意識や語句の対応構造などを指摘することは難しいものの、いずれも信濃と信濃以外の二人の男女の贈答であることは確かであろう。a、c、dは、都からやってきた男と地元の娘子の別れととれば理解しやすい。bはその逆の体である。

万葉集をみると、これと類想の歌群として次の歌群をあげることができる。

つぎねふ　山背道を　他夫の　馬より行くに　己夫し　徒歩より行けば　見るごとに　音のみし泣かゆ　そこ思ふに心し痛し　たらちねの　母が形見と　我が持てる　まそみ鏡に　蜻蛉領巾　負ひ並め持ちて　馬買へ我が背

（⑬三三一四）

反歌

泉川渡り瀬深み我が背子が旅行き衣濡れ潰たむかも

（⑬三三一五）

或本反歌曰

まそ鏡持てれど我は験なし君が徒歩よりなづみ行く見れば

（⑬三三一六）

馬買はば妹徒歩ならむよしゑやし石は踏むとも我は二人行

かむ　　（⑬三三一七）

右四首

これは旅行く夫が馬を持たず徒歩で行くことに心を痛め案じて、馬を買えと促す歌である。夫を思い遣る妻の切なる心内を詠んでいる。最終歌が、馬で一人往くよりも妻の同行を願うという夫から妻への答えの歌となっているのは信濃国の歌と異なるが、都と地方とを行き来する男の旅路をめぐる相聞世界を詠んでいるという共通点を指摘することはできよう。

このようにして、都と地方の対比は、「中麻奈」を「ちぐまな」と訓読することにより、地名と「千隈」の意味が重ねあわされたからこそ浮かびあがってきたものであった。

しかしながらそこにはまだ、なぜ「中」という二音節文字を用いたかという問題が残ったままである。

そこで信濃国の歌第二首～四首の並びにおいて歌の冒頭の地名表記を確認してみると、

信濃道者　伊麻能波里美知…（三三九九）

信濃奈流　**知具麻**能河泊能…（三四〇〇）

中麻奈尓　宇伎乎流布祢能…（三四〇一）

となっている。三四〇〇から三四〇一にかけては「知具麻」の音が意識されるとともに、それが地名であることを示すために、信濃の「信」と同じく二合仮名である「中」字を使用して表記されたのだというのは考えすぎであろうか。第一首（三三九八）には二字地名が無いが、これは配列の際の問題であるともいえ、少なくとも三四〇〇から三四〇一へは、同地名・異表記の歌であることとも相俟って並記されたのではないかと考える。

この、都と地方という視点に関連してもう一つ考察を加えておかなくてはならない事象がある。都竹説も触れている「しぐれ」と「鐘（鍾）禮」の表記についてである。

しぐれの仮名書き例（四具禮、之具禮）は集中に二十三例、「鐘（鍾）禮」と漢字二字で表記される例は一三例ある。「鐘」は zhōng という音を持つ字で、-g の音が意識され一字二音節で表記されたものである。このとき、仮名書きのうち十四例が巻十の秋雑歌及び秋相聞に分類される歌であるのに対し、「鐘禮」は十三例中八例が巻八、秋雑歌におさめられた記名歌で、しかも大伴家持をはじめとして、坂上郎女、大伴池主など家持周辺の歌人による歌での用字であることは留意すべき事実であろう。

衛門大尉大伴宿祢稲公歌一首

しぐれの雨間なくし降れば三笠山木末あまねく色付きにけり　（⑧一五五三）

大伴家持和歌一首

大君の三笠の山の黄葉は今日のしぐれに散りか過ぎなむ　（⑧一五五四）

しぐれは地名ではないが、名詞の表記の方法として一字二音節の「鐘（鍾）」の使用には、都（中央）にあった貴族層の文字遣いの志向の一端が看取できるのではないだろうか。

このような状況を考え合わせると、当該歌の「中」字の使用についても、家持周辺の文字遣いが東歌の表記に反映されたものとして、その関連にまで問題が広がる可能性があるようにも思われる。[9] しかし今回の考察範囲からは逸脱するので、今後の課題としたい。

六　むすびにかえて

これまでの考察から、一字一音節表記が基本の巻十四にあって、「中麻奈」の「中」は、文字使用としては異例であるが一字二音節の「チグ」として用いられていることを確認した。それに伴い「中麻奈」は「ちぐまな」と読み千曲川をさしており、地名（川の名）の持っている「ちぐま」の響きを「千の隈」の意味に重ねることで、恋の悲別歌としての表現世界を豊かに広げていたことを確認した。

それは、去っていく男と残される女という図式に代表される、都と地方を行き来する男と地方の女の相聞世界の表出であった。その位相こそが、当該歌の持つ「地域性」をあぶりだすものであると結論づけられるのではないだろうか。

＊本文は『萬葉集』（新編日本古典文学全集・小学館）に拠ったが、私にあらためたところもある。

注（1）　都竹通年雄「巻十四の『中麻奈』」『萬葉』第九号・昭和二十八年十月

（2）　同じ東歌の中の一首でもあり、当該歌との関連についても検討する必要はあろうが、今回は当該歌に的を絞り今後の課題とする。

（3）　沖森卓也『日本古代の文字と表記』吉川弘文館　二〇〇五年七月　第三節古代の地名表記―上代撰述風土記を中心に―

（4）　「二合仮名」とは、「字音の韻尾に母音を添えて二音節相当にするもの。例：『妹見監鴨』（『万葉集』134、「監」の韻尾mにuを添えて、韻尾を音節化する）」ものである。（前掲注（3））

（5）　馬瀬良雄「『千曲川』の方言チョーマ考」『玉藻』第三十六号・平成十二年五月

（6）　「チクマ」の「ク」は「グ」の鼻濁音を表す。

（7）　土井清民「信濃国・上野国・下野国・陸奥国の相聞」『セミナー万葉の歌人と作品』和泉書院　二〇〇五年五月

（8）　『続日本紀』和銅六（七一三）年七月条に「戊辰。美濃信濃二國之堺。徑道險隘。往還艱難。仍通吉蘇路。」とあるのが「今の墾り道」をさしているといわれる。

（9）　乾善彦は万葉集仮名書き歌巻の文字を分析することを通して、巻十四・十五と集末四巻とを文字使用の面でのつながりにおいて考える必要性を示唆している。（「万葉集仮名書き歌巻論序説」『女子大文学　國文篇』大阪女子大學紀要　二〇〇五年三月）